

# 福岡工業大学 機関リポジトリ

## FITREPO

Title	名詞句内のwh移動と優位性効果
Author(s)	宗正 佳啓
Citation	福岡工業大学研究論集 第42巻第2号 P147-P152
Issue Date	2009-9
URI	<a href="http://hdl.handle.net/11478/988">http://hdl.handle.net/11478/988</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher

Fukuoka Institute of Technology

# 名詞句内の wh 移動と優位性効果

宗 正 佳 啓 (社会環境学科)

## Wh-movement in a Noun Phrase and Superiority Effect

Yoshihiro MUNEMASA (Department of Social and Environmental Studies)

### Abstract

This paper suggests that a noun phrase projects up to CP as a phase and a wh-phrase can also project up to CP. Wh-movement can occur in a finite clause or non-finite clause. Wh-phrase can undergo movement to the Spec-CP of the wh-phrase according to the analysis presented here. There exist many multiple wh-interrogatives which have an apparent configuration yielding superiority effect in English. Although a significant body of work has been devoted to superiority effect, little is known about the reason why superiority effect is unstable. This paper shows that the appearance or loss of superiority effect depends on the constraint that requires an operator locally bind its variable and the application or non-application of wh-movement in a wh-noun phrase. German does not exhibit superiority effect, which is also explained as a consequence of the constraint and the application or non-application of wh-movement in a wh-phrase.

Keywords: *wh-movement, noun phrase, CP, phase, superiority effect, language variation*

### 1. 序

統語上の最小単位は、意味を考慮すれば命題に対応する統語要素であると考えられる。Chomsky (2000, 2001) は命題に対応する統語要素は *vP* と *CP* であると考え、それらを位相 (phase) と呼んでいる。しかし、位相の定義は曖昧で、命題に基づく定義であれば名詞句 *NP* 若しくは *DP* も位相になりうる。

本稿では、名詞句の *DP* は文を形成する *CP* と平行関係にあり、*CP* と同じく位相であり、*DP* の上に *CP* が存在すると仮定する。このことにより、英語の優位性効果の差異や、ドイツ語の優位性効果の消失が説明できることを述べる。

### 2. 名詞句と位相

これまで、文と名詞句の間に類似性があることは広く認められている。

(1) The enemy destroyed the city.

(2) the enemy's destruction of the city

(1)の主語、目的語は(2)の the enemy 及び the city と平行関係

にある。Abney (1987) はこうした平行関係を *DP* 分析によって捉えており、(1)と(2)の構造を示せばそれぞれ(3)、(4)のようになる。

(3) [<sub>TP</sub>the enemy T [<sub>VP</sub>destroyed [<sub>DP</sub>the city]]]

(4) [<sub>DP</sub>the enemy's D [<sub>NP</sub>destruction [<sub>PP</sub>of the city]]]

(3)では主語の *enemy* が *T* によって主格を与えられており、(4)では *enemy* が属格を与えられ、*destruction* の意味上の主語になっている。

こうした(1)と(2)に見られる文と名詞句の平行性は、名詞句を *NP* と考えるとうまく説明ができないが、*DP* 分析ではうまく説明ができる。*DP* 分析では、冠詞類、指示詞、*some* 等の数量詞、属格を付与する *D* が *NP* の上にある *DP* の主要部になると考えられている。(4)では、*enemy* が *DP* の指定部に入り *D* から属格を付与され、文における *T* からの主格の付与と格付与の面で全く平行関係にある。

このように、文である *TP* と名詞句としての *DP* の間には平行性があるが、両者は位相の観点から見れば異なった特徴を示す。前述のように、位相に関する Chomsky の命題に基づく定義からすれば、*DP* は位相になりうる。しかし、*DP* と平行関係にある *TP* は位相ではない。*TP* の主要部である *T* は、*C* や *v* などの核となる機能範疇 (core functional category) の一つであり、Chomsky (2000, 2001) は、これらすべての核となる機能範疇は、セクションによって完全なる  $\phi$  素性を持つことが可能であると考えている。ま

た、TはCまたはVによってセレクトされ、それによって完全なる  $\phi$  素性を持つ。TとVは動詞の特徴を反映した要素をセレクトする。これに基づく、文はTPの上に常にCPが存在することになる。また、CPは命題に基づく位相であるので、文と名詞句が平行関係にあり、名詞句も位相であると考えれば、(5)に示すように、名詞句はDPの上にCPが存在し、それが位相になっていることになる。<sup>1)</sup>

(5) [<sub>CP</sub>C [<sub>DP</sub>the enemy's D [<sub>NP</sub>destruction [<sub>PP</sub>of the city]]]

このようにDPの上にCPが存在すると想定すると、次の例のようにall等の数量詞が、冠詞の付いた名詞の前に来る統語配列が説明可能になる。

(6) [<sub>CP</sub>all [<sub>DP</sub>the [<sub>NP</sub>people]]]

冠詞のthe等はDPの主要部に生起するが、その前にallが生起する例では、allの生起位置が問題となる。しかし、allはDPの上にあるCPの主要部に入っていると考えerとうまく説明ができる。

また、名詞句をCPと分析すると、wh句の対応を考える必要がある。Wh句は文中では、移動によりCPの指定部に入ると考えられている。そこで、名詞句は文と平行性を持つという観点から、wh句はその名詞句内で基底の位置からCPの指定部に移動しているとしてみよう。(6)ではallがCPの主要部に生起すると考えたが、wh句がその前に生起する例がBritish National Corpus等を検索すると多々出てくる。

(7) I don't know what all. (British National Corpus)

こうした事実は、wh句が名詞句内でCPの指定部に移動していることを示唆している。

ここでは、wh句が名詞句内でCPの指定部に移動すると仮定するが、それを駆動するメカニズムについて考えてみよう。Chomsky (2000)の枠組みによると、疑問文の文中では、CPの主要部のCは解釈不可能な素性であるQ素性を持つとされている。この素性が文中のwh句と一致を起こし、Cに指定されているEPP素性によってwh移動が誘発され、wh句がCPの指定部に移動する。同様に、名詞句内においても平行的にDPの上にあるCPの主要部に解釈不可能なQ素性とEPP素性が指定されており、これらの素性により名詞句内でwh移動が生じると考えられる。

以上、wh句は名詞句内でCPの指定部に移動していることを見てきた。次節ではこれに基づき、英語の優位性効果及びドイツ語の優位性効果の消失について考察する。

### 3. 優位性効果

英語の多重wh-疑問文では、一つのwh句が文頭に移動し、他のwh句は元の位置に留まるが、wh移動の際、優位性効果が生じればその文は排除される。

(8) a. Who bought what?

b. \*What did who buy?

(8)のような文法性の違いに関しては、(9)に挙げてあるよう

な、Chomsky (1973)の構造上優位な位置にある句に変形操作を施すことを要求する優位性条件で説明されてきた。

(9) The Superiority Condition:

a. No rule can involve X, Y in the structure

...X... [...Z...WYV...]...

where the rule applies ambiguously to Z and Y and Z is superior to Y.

b. "... the category A is 'superior' to the category B in the phrase marker if every major category dominating A dominates B as well but not conversely."

Chomsky (1995, 2000)では、優位性効果は派生に関わる経済性の原理によって説明されている。具体的には、wh句はwh移動によりCPの指定部に移動するが、この移動が生起するのはCPの主要部のCが解釈不可能な素性を持っているためであり、その素性を消去するために顕在統語論(overt syntax)でwh句がCPの指定部に移動するとされる。その移動には、最短距離要素を引き寄せなければならないという派生の経済性に関する原理が適用される。この原理により、(8)においてはCに最も近い主語のwh句がCPに引き寄せられる。(8b)では、目的語のwh句は主語のwh句よりも遠くにあるため移動の対象にならないが、それを移動させているため非文となる。

このようにChomsky (1995, 2000)では優位性効果は派生に関わる経済性の原理によって説明されている。しかし、(10)に挙げてあるように、経済性の原理では説明が不可能と思われる実例が多数存在する。さらに優位性効果を経済性の原理に移行する前のChomsky (1973)では、(10)のような例は具体的に扱われていない。

(10)a. Who did pictures of who please t?

b. What did whose father buy t?

c. What did people from where buy t?

d. What did you buy t where?

e. What did you buy t when?

f. What did which man buy t?

g. What did a man from which country buy t?

h. What book did you ask which man to read t?

i. What did you talk to who about t?

j. \*Who left why/how?

では、なぜこうした例が存在するのであろうか。(11)–(13)に挙げてあるような多重wh疑問文を精査してみると、多重wh疑問文の文法的な文は、すべて(14)のような位置関係を持っており、元の位置にあるwh句が、移動したwh句の痕跡をc統御していないということがわかる。一方、非文法的な文は、すべて(15)の位置関係を持っており、元の位置にあるwh句が移動したwh句の痕跡をc統御しているということが分かる。

(11)a. Who saw what?

b. \*What did who see?

- c. \*Whom did John buy what for t?  
 d. \*Who does Mary believe that who suspected t?  
 e. ?Who believes that who suspected John?  
 f. \*Who did Mary wonder whether who suspected?  
 g. ?Who wondered whether who suspected John?  
 h. \*Who did you tell whom that Harry saw t?  
 i. Who did you tell t about what?  
 j. \*What did you tell who about t?  
 k. Who did you tell t to read what?  
 l. \*What did you tell who to read t?
- (12)a. Who did picture of who please?  
 b. \*What did what company buy?  
 c. What did whose father buy?  
 d. What did people from where buy?  
 e. Who knows which pictures of whom Bill bought?  
 f. Which men remember which picture of which women he liked most?
- (13)a. \*What did you buy why?  
 b. \*Who left why?  
 c. \*Why did who leave?  
 d. \*What did you buy how?  
 e. What did you buy where?  
 f. What did you buy when?  
 g. Who knows where Jean bought what?  
 h. ?Who remember that who be fired?  
 i. ?Who said that who saw Mary?  
 j. \*Who left before fixing the car how?  
 k. Who left before fixing what?

(14) ...wh<sub>i</sub>...t<sub>i</sub>...wh<sub>j</sub>...

(15) \*... wh<sub>i</sub> ... .wh<sub>j</sub> ... t<sub>i</sub> (only when wh<sub>j</sub> c-commands t<sub>i</sub>)

では、なぜ(15)のような位置関係を持っていると非文になるのか問題となる。

英語では、顕在統語論 (overt syntax) で必ず一つの wh 句が CP の指定部に移動する。そして、その際、形成された連鎖のメンバーの間には局所的束縛関係が成立していなければならない。<sup>2)</sup>従って、仮にこうした束縛関係をブロックするような潜在的な束縛子が介在すれば、正しい連鎖が形成されない。(15)の構造を持つ多重 wh 疑問文は、元の位置にある wh 句が、移動した wh 句の痕跡を c 統御しており、さらに非文になることに注目すると、元の位置にある wh 句は、移動した wh 句の痕跡の潜在的束縛子となり、移動した wh 句と痕跡との間の局所的束縛関係をブロックする働きを持っているということが予測される。従って、(15)のように、移動した wh 句の痕跡に対して潜在的束縛子が存在する多重 wh 疑問文は排除されることになる。一方で、そうではない、(14)のような構造を持つ多重 wh 疑問文は容認される。

ここで注意しなければならないのは、移動した wh 句の痕跡の潜在的束縛子になる wh 句の内部構造である。前節で見たように、wh 句はその名詞句内で CP の指定部に移動

している。

(16) [<sub>CP</sub> wh C [<sub>DP</sub> ]]

移動した wh 句は C と指定部対主要部の関係で一致関係を形成する。この一致関係により CP は wh 句の指標を獲得し、CP そのものが wh 句になる。もしそれが移動した wh 句の痕跡に対して c 統御していれば、その潜在的束縛子になる。移動した wh 句の痕跡に対して、潜在的束縛子が存在する多重 wh 疑問文が排除されるのはこうした事実によるものである。

では、ここでの分析が、どの多重 wh 疑問文にも有効かどうかこれから具体的に検証してみよう。

(17)a. Who saw what?

b. \*What did who see t?

(18)a. [<sub>TP</sub> who<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> saw what<sub>j</sub>]]

b. [<sub>CP</sub> what<sub>j</sub> did [<sub>TP</sub> who<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> see t<sub>j</sub>]]]

(17)の文の変形操作を施した後の構造を図示すると、それぞれ(18a, b)のようになる。(18a)において、who は CP の指定部に移動し、t<sub>i</sub>と連鎖を形成する。元の位置にある what は t<sub>i</sub>を c 統御していないので、その潜在的束縛子にはならない。しかし、(18b)では、元の位置にある who は、what の痕跡を c 統御するため、その潜在的束縛子になり、what の局所的束縛関係をブロックし非文となる。

では、次に純粹優位効果を示す(19)のような多重 wh 疑問文を取り上げてみよう。

(19)a. What did you give t to whom?

b. \*Who did you give what to t?

ここで、(19)の構造表示を見ると、それぞれ(20a, b)のようになる。

(20)a. [<sub>CP</sub> what<sub>k</sub> did<sub>j</sub> [<sub>TP</sub> you<sub>i</sub> t<sub>j</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>j</sub> give t<sub>k</sub> to whom]]]

b. [<sub>CP</sub> whom<sub>k</sub> did<sub>j</sub> [<sub>TP</sub> you<sub>i</sub> t<sub>j</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>j</sub> give what to t<sub>k</sub>]]]

(20a)においては、what の痕跡を whom が c 統御することはない。しかし、(20b)においては what が whom の痕跡 t<sub>j</sub>を c 統御し、その潜在的束縛子となる。従って、(19b)は排除されることになる。

では、次に、wh 句が、他の wh 句を越えて移動しているにも関わらず、文法的と判断される多重 wh 疑問文について考えてみよう。

(21)の文は明らかに構造上低い位置にある wh 句を移動させているので、非文として排除されるはずであるが、実際はそうではない。

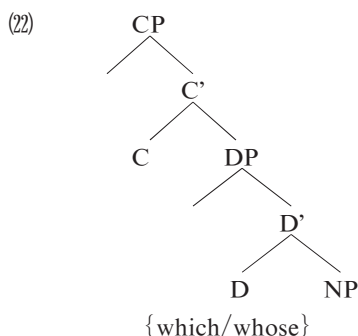
(21)a. Which book did you ask which man to read t?

b. What did whose father buy t?

これらの文法性は which, whose の構造上の位置と深い関わりがあるので、まず、そのことについて考えてみよう。Which や whose の構造上の位置については、Jackendoff (1977), Radford (1988) 等で分析されているように、NP の指定部にあると考えられる。しかし、Abney (1987) 等で



提案されている DP 分析を採用するならば、これらは DP の主要部に生じていることになる。ここでは便宜上この分析を採用し、その位置を図示すると(22)のようになる。



(21a)は明らかに D-link した wh 句が関連した例である。Pesetsky (1987) は D-link した wh 句は移動しないことを示唆している。実際、多重 wh 疑問文において、すべての wh 句を文頭に移動させるルーマニア語において、D-link した wh 句は移動せず元の位置に残留するという事実がある。

(23)Bulgarian

- a. Koj kakvo e kupil?  
who what bought  
“Who bought what?”
- b. \*Koj e kupil kakvo?  
who bought what
- c. Koj e kupil koja kniga?  
who bought which book

ここでは文と名詞句は平行関係にあると仮定している。そのためこうした事実に従うと、(22)において which は D-link しているため、名詞句の内部においても平行的に DP の上にある CP への移動はないということが予測される。移動がないのであれば、which は DP 内に留まり、移動した wh 句の痕跡に対して c 統御できないので、その潜在的束縛子になることはない。従って、(21a) のような文は文法的と判断される。一方、(21b) のような例に関して、whose は which とは異なり D-link していない。D-link しないのであれば whose は which と対照的に移動が可能であることが予測される。しかし、英語では whose は次の例のように移動することはない。

(24)\*Whose do you think[t book]was stolen?

従って、平行的に(21b)の *whose* は名詞句内で DP の主要部から移動することはないことが予測される。<sup>3)</sup>この場合、*whose* は DP の内部に留まり、移動した *wh* 句の痕跡に対して c 統御できないため、その潜在的束縛子になることはない。このため(21b)のような例は文法的と判断される。また、(24)のような例においても、主語 NP に支配されている PP の内部にある *wh* 句は、CP の指定部に移動している *wh* 句の痕跡を c 統御することはない。

(24)a. Who did pictures of who please t?

b. What did people from where buy t?

PP の内部にある wh 句は、移動している wh 句の痕跡に対

して潜在的束縛子にはならないので、(24)の文も文法的と判断される。

では、次に付加詞を含んだ、(25)-(26)のような多重 wh 疑問文の文法性について検討してみよう。

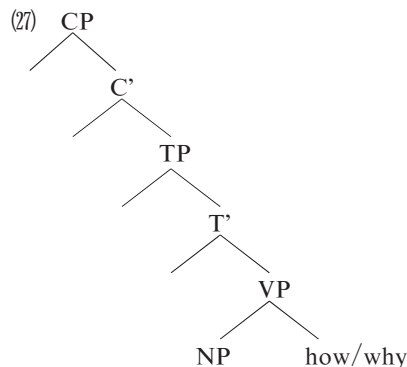
(25)a. ?Why did you buy what t?

b. \*Why did who leave t?

(26)a. ?How did you buy what t?

b. \*How did who fix the car t?

付加詞の how や why の付加位置に関しては、様々な分析がされており、how は VP に付加しているということでは意見の一致が見られるが、why の付加位置についてはゆれがある。例えば、Huang (1982) 等は why は VP に付加していると考えており、Lasnik and Saito (1984) は IP (TP) に付加していると分析している。ここでは、how も why も VP に付加していると考えて議論を進めて行く。



How や why が VP に付加しているとする、(25)、(26)の a の文においては、元の位置にある what は、移動した how または why の痕跡を c 統御しないことになる。元の位置にある what は移動した wh 句に対して、局所的束縛関係をブロックする潜在的束縛子にはならない。しかし、(25)、(26)の b の文では、主語の位置にある wh 句が移動した wh 句の痕跡を c 統御してしまうため、b の文は排除されることになる。

では、次に how や why が元の位置にある多重 wh 疑問文について検討してみよう。

(28)a. \*Who left why?

b. \*Who left how?

(29)a. [<sub>TP</sub> who<sub>i</sub> [[<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> left] why]]

b. [<sub>TP</sub> who<sub>i</sub> [[<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> left] how]]

これらの文においては、who の痕跡は、元の位置の wh 句に c 統御されていないように見える。従って、文法的と判断されるはずである。ところが、英語は VP 内主語仮説に従うと考えられるので (Hoekstra (1984), Kitagawa (1986), Sportiche (1988), Koopman and Sportiche (1991) 参照), (28) の主語の wh 句は、元は VP の指定部にあり、そこから格をもらうため TP の指定部に移動していることになる。従って、付加詞の why や how は VP の指定部にある主語の wh 句の痕跡よりも高い位置にあることになる。付加詞の why や how は副詞類であり名詞句ではないので、名詞

句と異なりそれらは内部で CP に移動するという事はない。そのためそれらは名詞句の構造を持たず、そのまま直接主語 wh 句の痕跡を c 統御し、主語 wh 句の痕跡に対して潜在的束縛子になる。従って、(28)の文は容認されないことになる。また、(30)において、前述のように副詞類である why が VP に付加している場合、主語 wh 句の痕跡を c 統御してしまい、それに対して潜在的束縛子になる。しかし、why を名詞にして前置詞が伴った場合、文法性が向上する。

(30)a. \*Who destroyed the toy why?

b. Who destroyed the toy for what reason?

(30b)においては、what reason は前置詞の補部にあり、主語の痕跡を c 統御することはない、それに対して潜在的束縛子になることはない。(30)の対照性はこうした理由によるものと考えられる。

次に、when や where が関連する多重 wh 疑問文について検討してみよう。(31)がその例である。

(31)a. What did you buy t when?

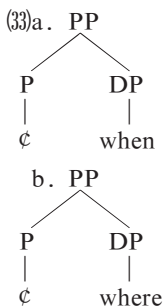
b. What did you buy t where?

一見、(31)の when や where は what の痕跡を c 統御しているかのように見える。従って、when や where が、what の痕跡に対して潜在的束縛子となるため、(31)の文は排除されるはずである。これは、ここでの枠組みの反例の様に見える。しかし、こうした when や where は、why や how とは異なり、疑問代名詞として、(32)のように前置詞を伴い疑問文を形成することがある。

(32)a. Where did you get that book from t?

b. Since when has he had a beard t?

そこで、Bresnan and Grimshaw (1978), Huang (1982) が分析するように、(32)の when や where は、(33)に示すように、PP の空の前置詞の補部にあるとすれば、それらは what の痕跡を c 統御することはない。従って、what の痕跡に対して、潜在的束縛子にはならない。このため(31)のような文は容認されると考えられる。



#### 4. ドイツ語の優位性効果

前節では、英語の優位性効果及びその消失を見てきた。本節ではドイツ語に焦点をあて、ドイツ語の優位性効果の消失について考察して行く。

英語では明らかに優位性効果が観察される環境において、ドイツ語ではそれが消失する (Müller (1995) 参照)。例えば、(34)のようにドイツ語の多重 wh 疑問文では、移動した wh 句の痕跡を c 統御し、その痕跡に対して潜在的束縛子になる wh 句が存在しても優位性効果は観察されない。

(34)a. Wer hat was behauptet?

who has what claimed

“Who has claimed what?”

b. Was hat wer behauptet?

what has who claimed

条件が同じ環境で、こうした言語差異が生じるのはドイツ語と英語の wh 句の構造が異なるためであると思われる。英語では疑問文の環境において wh 句が基底位置に生起することはないが、ドイツ語においては wh 句が文頭に移動せず、基底位置に生起する場合がある。

(35) Hat hier etwa wer wem was erklärt?

has here Particle who whom what explained

“Did someone explain something to someone here?”

このようにドイツ語では wh 句が基底位置に生起できるため、wh 句の内部においても基底位置に留まり、その句の CP の指定部まで移動していない可能性が出てくる。

(36) [<sub>CP</sub> C [<sub>DP</sub> wh ]]

Wh 句の内部において、CP の指定部まで移動していないのであれば、その wh 句が移動した wh 句とその痕跡の間に介在する場合、移動した wh 句の痕跡を c 統御できず、その痕跡に対して潜在的束縛子になることはない。従って、(34b)のように明らかに優位性効果が生じる環境においてそれが生じないのはこのためであると考えられる (cf. Pesetsky (2000))。

#### 5. 結語

本稿では、名詞句は DP までの投射ではなくその上に CP の投射があり、また、名詞の wh 句はその内部で CP の指定部に移動することを述べてきた。さらに、こうした移動の有無の帰結として、英語やドイツ語の多重 wh 疑問文に観察される優位性効果及びその消失が説明できることを主張した。本稿のこの試みは多重 wh 疑問文に対する統語的アプローチであり、意味的考察は行っていない。多重 wh 疑問文に関しては、言語を通して wh 句の移動の有無或いはその他の要因により、シングルペアの読みの解釈、また、ペアリストの読みの解釈に対して影響を与える場合がある。例えば、フランス語の wh 疑問文では wh 移動がない場合があるが、多重 wh 疑問文において wh 句が移動せず、元の位置に留まる場合はシングルペアのみの解釈が可能であり、英語と同じく複数の wh 句の内一つの wh 句が移動した場合はペアリストの読みが生じる。残された問題として、こうした統語論と意味論が関連する事例に関しても考察する必要があるが、この件に関しては稿を改めて議論するこ

とにする。

## 註

1) ここでは命題を表すという意味機能に基づいて DP の上に CP を想定するが、命題を表さないと思われる DP についても、名詞句と文との平行性という観点から、DP の上に CP を想定する。

2) Wh 移動によって生じた連鎖のメンバーの間には、局所的束縛関係が成立していなければならないが (Aoun (1985, 1986), Rizzi (1990), Stroik (1996) 等参照), 以下の(i)のように、移動した wh 句の連鎖の間に他の wh 句が介在しているにも関わらず文法性が低下しない例がある。

(i) Which car do you wonder how to fix?

しかし、(i)は補文が時制節になれば非文になる。(i)が容認されるのは時制の島が関与していないためであり、Ishii (2006)が主張するように(i)のような時制の島がない場合には、補文の wh 句が主節に移動した wh 句の痕跡をc 統御せず、介在効果が消失してしまうことによるものであろう (詳細は Ishii (2006) 参照)。

3) Which や whose が名詞句内で移動しないとすれば、名詞句と平行関係にある文のレベルにおいても移動はないことが予測され、次の(i)のような文は排除されることになる。

(i) {Which car / Whose car} did you  
fix yesterday?

しかし、英語は日本語や中国語とは異なり、wh 疑問文は wh 素性を内包した句を必ず一つ文頭に移動して wh 疑問文であることを表示する言語であるため、(i)のように wh 素性を有する wh 句が名詞と随伴して文頭に移動する (cf. Pesetsky (2000))。

## 参考文献

- Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Aoun, Joseph (1985) *A Grammar of Anaphora*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Aoun, Joseph (1986) *Generalized Binding: The Syntax and Logical Form of Wh-interrogatives*, Foris, Dordrecht.
- Bresnan, Joan and Jane Grimshaw (1978) "The Syntax of Free Relatives in English," *Linguistic Inquiry* 9, 331-391.
- Chomsky, Noam (1973) "Conditions on Transformation," *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by Anderson and Kiparsky, Holt, Rinehart and Winston, 232-286, New York.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hoekstra, Teun (1984) *Transitivity*, Foris, Dordrecht.
- Huang, Cheng-Teh James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT.
- Ishii, Toru (2006) "On the Relaxation of Intervention Effects," *Wh-Movement: Moving On* ed. by Lisa Cheng and Norbert Corver, MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1977) *X' Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) "The Position of Subjects," *Lingua* 85, 211-258.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1984) "On the Nature of Proper Government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Müller, Gereon (1995) *A-bar Syntax*, Gruyter, Berlin.
- Pesetsky, David (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric Reuland and ter Meulen, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David (2000) *Phrasal Movement and Its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, 425-449.
- Stroik, Thomas (1996) *Minimalism, Scope, and VP structure*, Thousand Oaks: Sage Publications